

活用場面

A1 : 教師による教材の提示

B1 : 個に応じる学習

自分の作品を客観的に鑑賞し、検証する

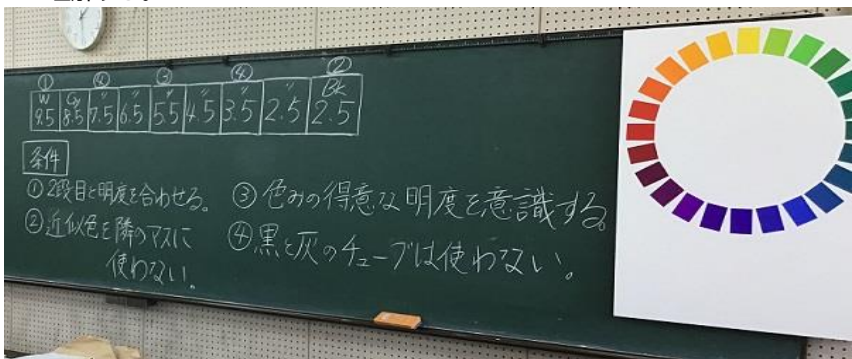
■ 使用する機器、アプリ等

タブレット、カメラ機能

■ 学習のねらい

- ・前時に完成させた 9 段階のグレースケールと同じ明度になるように、有彩色の明度が認識できる。
- ・明度、彩度、色相の知識を活用し、自在に調色することができるようになる。

■ 授業の流れ(50 分) ※全 8 時間のうち 6 時間目

時間	学習活動
5分 導入	<p>○本時の目標と課題の条件の確認 ○基本的な色彩理論の復習 ※「赤」は明るい印象を持つが実際の明度は暗いことや、「黄」は彩度が高く、明度も高いので暗い段階では使いにくい、など「色の印象」と実際の色の明度が違うことを理解する。</p> 
20分 展開①	<p>○一番明るい色(右端)と一番暗い色(左端)をはじめに着彩し、その後中間のマスを埋めるように着彩する。 ○隣り合う色彩は、同系色とならないよう注意する。 ※ここではタブレットを使用せず、自身の見え方と感覚で明度の差を感じ、確認するようにする。</p>
20分 展開②	<p>○タブレットのカメラモードで作品を撮影し、白黒写真(彩度を0)に編集する。 ○この時間で着彩した部分の明度と前着彩したグレースケールの明度があっているかを確認し、次の調色に生かすようにする。</p>
5分 まとめ	<p>○片づけ、次回の授業について</p>

■ ココで ICT を活用!



作品を撮影して明度を確認

各自で作品を撮影し、彩度0に編集する



※生徒の活動の様子、前回制作したグレースケールと有彩色の明度とを比較し、確認している。

■ ICT 活用のメリット

自分の作品を客観的に検証することができる

画像を加工し有彩色のカラースケールを無彩色に変換して見ることで、明度の認識が苦手な生徒も客観的、直感的に視覚認識することができるようになる。画面で客観視することで、本時の導入部分で説明があった「赤」は明るい印象を持つが実際の明度は暗いこと、など色相の違いによって色の見え方に違いがあることが実感できたようだった。

また、自分の制作途中の作品を保存しておき、完成した時にもう一度見ることができるようにしておく生徒も多かった。制作過程を保存できることは、自分の発想や構想がどう実現できたかを検証することができるなど、美術、工芸にとっては有効に活用することができる。

<完成作品>



■ 本実践での工夫

はじめから ICT 機器に頼らない

「明度、彩度、色相の知識を活用し、自在に調色することができるようになる」ことが題材の目標である。自身の感覚を鍛えるために、はじめは ICT 機器に頼ることなく自分の知識と感覚を大切に制作を進め、ICT 機器はあくまでも自身の成果を確認するために用いることを大切にして

いる。

■ 実践の振り返り-活用を深めるために-

美術では、主観的な見方や感じ方を大切にしているが、他者の感じ方を意識することも表現活動では重要である。ICT 機器の活用により、客観的に作品を見ることから新たな気づきが得られ、制作に生かすことができる方法を生徒は知ることができた。制作途中の作品を保存することも含め、自主的に今後の学習や制作に柔軟に活用していくことが期待できる。